

開拓の群像(六)

乗合い馬櫓の御者だった

代議士 尾崎 天 風

ソレイオリヤー

ソレゆけ オリヤー

雪のノッケ街道に百太郎の奇声がびびく。雪けむりをあげて、乗合馬櫓が跳ぶように滑った。良く肥えた青毛の馬の尻に、たずな端を振り上げ、鞭をくれながら百太郎の目が、ほっかぶりのかげに光った。

馬櫓の箱の中には、火鉢がたかれ、毛布を頭から被った乗客が、五、六人、その中に折り曲げた膝に書類袋を乗せて、胸元に両腕で抱え込んで、森田太吉も乗り込んでいて声をかけた。「おい、あんちゃん、ノッケに着くの何時だ」御者の百太郎は、未だ少年の幼さが残った頬被りの顔を振り向きもせずに、無愛想に「着いてみなきゃ、わかんないべさ」と答えた。下常呂原野は曇天の幕が薄く覆い、ジュルラミンの鍋底のような太陽が浮かんでいて。空気が凍って、その鈍いひかりにチラチラと反射して、それを引き裂くように百太郎の振下るす鞭が鳴った。

太吉は、常呂外四ヶ村戸長役場職員で、野付牛（北見）まで、役所の書類を届けに行く途中であった。明治三〇年の土佐団体で入殖

した森田又蔵の息子で、読み書きが出来た事から、役場勤めをしていた時の事である。

尾崎百太郎は、明治一九年、佐賀県に生まれ明治三一年に常呂に移住してきた。

明治の三〇年半ばごろ、常呂と野付牛を結ぶ通称ノッケ街道の駅通馬櫓の御者をしていた、後に五区から衆議院議員になる、尾崎天風その人である。

百太郎は昭和六年、初めて衆議院議員選挙に立候補した。

立会演説会の会場で太吉と百太郎は再会した。あの、青っぱなをすすりながら、馬の尻を叩いていた若者の面影は無かったが、野心に燃えた光る目は、御者の百太郎のものであった。「ワシが判るかい、戸長役場にいた森田だよ」本当に判ったか、どうか、定かでないが百太郎は、三〇数年前の乗合馬櫓の常連客に今度は愛想良く、何度も握手を返した。

「馬追いの百太郎も偉くなったものよ」

数日、太吉は娘や知人を相手にその時の様子を繰り返して語って聞かせた。

尾崎天風の百太郎時代を知るには、格好の本がある、佐呂間の川口（浜佐呂間）で生まれた、中山正男の自伝的小説「馬喰う一代」である。

天風は、その中で、小坂六太郎と言う名で主人公の正男の父がモデルである米太郎の仇役で頻繁に登場するのである。

お互い、馬追いと馬喰う仲間で、何かと張合い、小説の中でも六太郎は代議士に出世す

る。馬喰うで一生を終えた、正男の父は、ライバルであった馬喰う仲間の百太郎が目先が

きき、木材で儲け、新聞社の社長に収まり、縦横無人の活躍をして、のし上がっていくのを、心よしとはしなかつた様で、息子の正男に、夢をたくして、天風と張り合った感がある。小説の中では、正男は大平と云い、大正

二年にトウフツ村（当時、佐呂間はトウフツ村と云っていた。大正三年に分村して佐呂間村になる。）の川口（浜佐呂間）に生まれ、母は、幌岩の農家の娘で、大平が生まれて間

もなく、米太郎が飲み屋の女を引込み、追いついてしまふ。大正一〇年、大平の教育を考えて駅のある、当時、活気あつた留辺蘂に引き上げる。大平はとんだ悪戯小僧であつたが、勉強は出来、やがて、米太郎を親分と仰ぐ馬喰う仲間達の期待を一身にあつめて、東京に出ていくのである。

さて、「馬喰う一代」の中の小坂六太郎（小坂龍堂）は、無学で、度胸があり、小才がきき、（映画化されたときは、ゼニコの六といわれる程の、守銭奴として登場する。）

金儲けの上手い少々、軽薄な人間として描かれているが、それでいて憎めない人物として親しみを感じさせてくれる存在である。

「その頃、この街（留辺蘂）の人気者米太郎（喧嘩と相撲で人気者だった）と名声を競い出した者に、同じ馬喰出身の小坂六太郎がいた。（中略）ハッパ馬喰で覚えた呼吸をそのまま、木材の方へ手を出したのが、ようやく

尾崎天風氏像

所在地 富士見(石北峠)
建立年月日 昭和三十四年六月
碑文揮毫者 上田桑鳩



元代議士、尾崎天風氏の碑の建立の由来

昭和八年より留辺蘂・上川間の道路開削について懸案事項とされていたが、昭和二九年の一五号台風の、多大の風倒木搬出道路開削のために尽力した。昭和三十一年九月記念すべき開通を見た。この功績をたたえてこの碑を建立した。

くこの頃になって芽を吹き出してきた。

(中略)小坂六太郎がルベの街なかに、白壁の三階建をたてて、そこで料理屋紅葉屋をひらいたのは、盗伐で儲けた金だと噂されていた。金を持った六太郎は、持ち前の政治性を發揮して町長を買収し、そこに競馬場をつくった。彼が会長になって第一回の競馬大会をひらいたのは、大正一四年の秋だった。その頃の六太郎は、もう馬喰うも馬追いも眼中になかった。むしろそうした前身をかくそうとしていくくらいであった。

その風采もひどく変わっていた。髪を七三にわけて金縁眼鏡をかけ、新流行の洋服を着ていた。人を呼ぶのも「お前」を「君」に改め「おらあ」あ僕になおし、ひとかどの紳士を装っていた。

実は、この時の競馬大会には、六太郎の持ち馬、「北の王」が、米太郎の馬「磯千鳥」と同じレースで競う事になっていた。

ところが、北の王が、サッポロ競馬で二回、等をとっている馬であることが、米太郎の抗議で、露見して六〇〇メートルのハンデイがつけられての勝負となり、結局は米太郎の磯千鳥が優勝する訳だが、小坂は「名

を売る事を目的として開いた大勢の前で、逆の結果をさらしたのだからひどく面白くない。こうして彼は、彼の前身であった馬喰う一族とは互いに憎みあう仲となってしまった。

米太郎が馬喰うを中心とした底の民衆、庶民の人気を持っていたのにひきかえ、小坂六太郎は金力と料理屋(ごけや)の持つ魅力と、彼の独特の政治力とで、町の上層部の支持をとっていた。どちらにせよ二人は町の人気の対角線に立っていたのである。

こんな風に、小説の中の六太郎こと百太郎(天風)は、いわば、悪役として書かれている訳であるが、常呂町史、上湧別町史、留辺蘂町史、佐呂間町史に出てくる数少ない天風の記述を調べても年代などにも矛盾があり、相当に小説化された内容であると思われる。

今の富丘地区に明治四〇年にキリスト教の理想農場をに移住してきて近藤農場を経営した近藤直作のもとにも、大正五年天風が留辺蘂に釧路新聞通信所をつくり、新聞事業を興し、網走でも新聞を発刊して訪れたらしく直作は自伝のなかで、当時の天風と代議士になってからの思いでを次のようにかたっている。

「佐呂間在住のころの交友中に尾崎天風氏があつた。当時、網走にて新聞を発刊経営しており、口に筆に縦横の活躍をしていた青年論客であつた。しかし、思想に鍛練を欠き、言論の道筋にいくぶん覚束なく感じられる節があつたので、将来のため読書研究をすすめ、

「これでも読んで勉強しないと、物笑いになるぞ」と警告し、内村鑑三講演集一冊を呈した事があった。かく高言した自分の知識のごとくも、聖書をはぶいては、実業の日本、福音新報、内村氏の著書雑誌をひもとく程度であった。しかし、内村講演集は氏の思想啓発を助け、信念上裨益するところがあつたものの如くであつた。

そして二十星霜、氏はついに北見地方より選ばれて衆議院に議席を得るに至つたが、ある年、上京の節、懇切な招待をうけ、氏の新居を訪れたところ、夫婦にて喜び迎え、色々と歓談の末、邸内を隅なく案内してくれた。

最後に二階の書齋に至ると、中央のテーブル上に読み古した一冊の冊子が乗せてあつた。

見れば粉う方なき、内村先生の講演集であつた。書棚にギッシリ詰まつた数百冊の書籍中、この一冊が抜き出されてあつたのは、故意か偶然か。主人の説明もなく、客の質問もなかつたが、説明以上の説明がその日の招待に感じられ、同氏が今日の地位にあるのも故あるかなとなづかれた。

この文面でも察しられるように、この時代の天風は、未だ充分な素養は身にはつけていなかった。

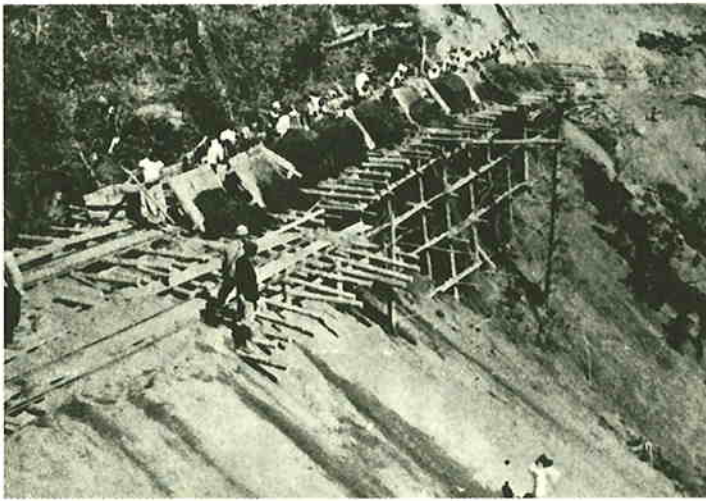
博打が天才的につよかつた。というより、イカサマ賭博が得意だつた。

馬追時代には、まだ若いのに、その方でも頭角をあらわしていた。賭博に勝つと、仲間はおいそれと帰らせてはくれない。百太郎は、

トイレに行くふりをして、よく窓から逃げ出した。まさしく、こころへんは「ゼニコの六」の面目躍如であつた。入つた金は無駄遣いしなかつた。なかなかの蓄財家ぶり、やがて地域の有名人にのし上がつていく。

佐呂間の郵便局の横、天光堂の車庫の辺りに料理屋を経営していたことがあつた。

石北峠道路建設作業風景



大正の始めの事である。

当時の佐呂間は、若佐市街が商業の中心地であつた。明治三十九年に岐阜県からの大野広を団長とした団体入植がはじまり、開拓がすすみ移住者が増加していった大正の初期にはすでに市街地を形成していた。佐呂間郵便局も大正二年、この市街地に移転していた。

武士市街とよばれ、計呂地、芭露につながる道路も開通し、下生田原、留辺蘗の駅にも近いなど、隆盛をきわめていた。

当時、佐呂間は鑄沸村とよばれ、常呂村外四ヶ村戸長役場に属し、村の役場は、今の常呂町にあつて、すでに村の中心が武士にあつただけに、手続き、届出など、不便このうえもなかつた。そうした、サロマベツ原野の移住者の増加にともない、住民の要望も強く、大正三年分村が決定して、佐呂間村の誕生となるわけだが、当然、役人や政治家の往来が顕著になり、天風の料理屋も、接待の場所になつた。天風は、自前でそうした人を接待する等、巧妙にとりいつた。

馬追い、馬喰うから身を興した天風には、大いなる野望があつた。そのためにも、チャンスは逃さなかつた。

役場の建設地を巡つて誘致争いがおこつた。さきにも記述したように佐呂間の市街地より武士の市街地のほうが、人口が密集し、交通面でも、商業の中心地でもあり、郵便局も、佐呂間から移転したばかりという役場所所在地としては、適地と思われたが、どうしたこと

か、佐呂間市街、天風の料理屋の道路向に決定してしまうのである。仮庁舎に天風の料理屋の一部を月八円で借り、初代戸長高橋栄昭も赴任して大正三年四月一日開庁の運びとなる。武士住人の二度にわたる、支庁、北海道庁等への陳情運動も、功を奏さなかった。武士住民の不満は後々までくすぶった。

「その後の、佐呂間地区、若佐地区の分村、合併ともなつて残った」と佐呂間町史に記されている。

天風が何時、佐呂間を去つたのか、定かではないが、ある時、彼の、料理屋（後家屋）で雇い女が井戸へ身投げして自殺する事件がおこつた。案外そんなところにも理由があつたのかもしれない。資産家の象徴のように料理屋経営があり、天風も、経営者としての利を充分に利用して、野望への足掛かりをつくに違いないが、苦境に身を落とした女の生き血をすう、生業であつたことには違いない。天風の、佐呂間、常呂、上湧別の三町にとつてのかわりは、何と言つても湧網線の誘致運動であろう。

北海道開拓の歴史のなかで、道路と鉄道の果たした役割は限りなく大きい。

未だ、道路も鉄道も引かれていなかった開拓者の入植の苦勞は、言葉に現すことの出来ない程の苦難の道のりであつた。

百太郎の馬櫛の客であつた森田太吉は明治三〇年ごろ、高知県から、常呂町の土佐部落に両親と弟と四人で入植しているが、最初の



馬喰う一代の映画の場面

入植の経路が土佐郷土史に詳しく記述されている。

一行は高知県浦戸の港から神戸通いの汽船に乗り神戸から米国船に便乗して小樽港に向かった。この船は石炭の積込船で狭い船倉に寿司詰めでも夜も昼も座りどうしで一〇日あまり高知県を出てから二週間振りに小樽港に上

陸して一同蘇生のおもいで地面をなぞって喜んだ。小樽からの船は北見丸といひ宗谷、北見の沿岸の漁場に米、味噌を運び漁獲物を集荷してくる沿岸通いの小蒸気船であつたという。浦戸の港を出てから一八日目に一行は、下湧別の浜に上陸して二泊して長い船旅の疲れを癒して、いよいよ陸路を目的の地に進ことになるわけだが当時、下湧別常呂間には道路がなく湖口のなかつたころの、ワッカの砂丘一二里（四八キロ）を、波うち際に添って一歩一歩歩かなければならなかつた。家財道具の一切を背負う人、天秤棒で担ぐ人もあり、幼児の手をひき乳呑児を背負つた婦人もいた。強壯な若干の人だけが日も暮れ方に、常呂の浜に着く事が出来たが、外の者は、遅れてワッカの駅通の馬小屋に泊めてもらひ翌日、目的の地にやつと到着している。

故郷を出てからなんと二三日間かかつた事になる。当時の入植者は皆そうした苦勞の果て開拓地に辿りついた。

天風も同じ苦難を経験したに違いない。駅通の馬追いをしていて、この地域の交通事情には精通していた天風は、後に自分の政治生命をかけて、道路と鉄道の開通に取り組むことになる。

鉄道が初めて日本を走つたのは明治五年新橋、横浜間である。本道は、明治一三年アメリカ人クロフォードの手で、幌内鉱山の石炭輸送を目的として、手宮、軽川間に敷設されたのが始まりである。

明治二六年道庁は開拓と国防上の見地から、本道鉄道予定幹線を定め、計画を進めていたが明治二九年五月、北海道鉄道敷設法を制定公布して、主要幹線に次々と鉄道が敷かれていった。北見地方では、最初は網走本線（池田、網走間）で明治四〇年に着工大正元年陸別、北見間をもって前線開通した。

佐呂間を通過する湧網線も、すでに明治の二九年北見海岸線として道の第二期予定線に編入されていた。何故大幅に遅れてしまったのか、少々ななくなるが、その経緯を記述してみる。常呂町史に「海岸線と山の手線抗争」といわれている鉄道誘致合戦の顛末記が載っている。

「網走―湧別間の海岸回りの路線の早期着工を望む、網走側の期成会が、代議士白石義郎を中心に運動を進めたのに対し、北見―湧別間の着工を望む野付牛同志会は、議会議員前田駒次を中心に、政友会の本部に働きかけ、強引に政党を動かして湧別線敷設を決定させた。

前者は網走を起点としてオホーツク沿岸を中心に、湧別に出て名寄に向かう「海岸線」で、後者は、野付牛から分岐して、留辺蘂、遠軽、上湧別を経て紋別より名寄にいたる路線で、「山の手線」と呼ばれていた。

明治四二年八月、鉄道院から森安、安田両技師が実地踏査のため現地に派遣されたが、網走から海岸部を調査し、サロマ湖沿岸にいたり海岸線の状況を把握すると、佐呂間から

留辺蘂に出て、現常紋トンネルの峠を越えて、遠軽に出てほぼ両線の調査を終えた。

両技師の結論は、海岸線は平坦でありあまり支障は無いが、山の手線は常紋トンネルの開削の必要ありということ、経費の面で海岸線が有利であると復命した。しかし、野付牛では、この事で断念することなく、村をあげて運動をつづけ、明治四三年七月道建設事務所の筒井弥一郎技師が、山の手線の実地踏査の結果、トンネルなどの開削はとくに難工事ではないと断定し、同年九月鉄道院線路調査課長山口技師の視察となった。その結果、明治四三年九月網走―名寄間の線路は、山の手線に決定したのである。」

この事により、湧網線全線開通まで、四〇年もの長い年月と陳情要請の運動を余儀無くされたのである。

明治、大正と、そして昭和の戦前と、政治家と役人、それに群がる利権屋の露骨に暗躍する時代であった。

この平成の時代にもその手の輩はあとをたさないが……

この時の工事が「たこ」と呼ばれた強制労働者の虐待、酷使の犠牲の中で進められ、常紋トンネルの壁に生きながらにして塗りこまれ埋められていた話は、のちに壁が崩れて、犠牲者の人骨がでて、立証された。「トンネルなどの開削はとくに難工事ではないと断言した」ことから、当然工事見積りも低かった筈で、多くの犠牲者にそのしわ寄せがまわつ

たに違いない。

この山の手線が開通したのは大正十年五月であった。地元民は大正八年、中湧別開発期成会を結成して再び運動を開始した。

尾崎天風は、常呂から代表の一人として東武代議士と共に、道の関係機関にたいしての陳情団に名を連ねている。

大正一〇年、一〇月中湧別で、沿線五カ町村連合大会が開かれ、本線促進の宣言が決議される。佐呂間から林由一、常呂から天風が出席している。度重なる陳情運動の成果もあり、昭和三年一〇月、中佐呂間において関係五カ町村連合大会が開催され、この時、尾崎天風が湧網線速成期成会長に就任した。

百太郎の天風は今や押しも押されぬ、名士になっていた。若い時、馬追い、博打で儲けた金で、上京して数年間、漢学をおさめるなどして、自己を磨いた天風は、大いなる野望を抱いて帰郷した。それから二〇星霜、着々と、階段を上がっていった。

駅通の馬追い時代、可愛がって世話をしてくれた駅通のおばちゃんとの約束があった。「きつと、世話になったお返しはする。」

北海タイムスの通信員時代には、郷土の記事を数多くだして、地元の紹介にとめた。のちに北海道新聞社の社長など、新聞人としてもおおきな足跡をのこしている。

当時新聞発行を手がけることは、文化人の代名詞であり、情報にも通じ、人脈も豊富でなければ出来ない事であった。

湧網線の誘致運動に名を残している名士
なかに、新聞を手がけた役員が何人か名をつ
らねている。貴田国平は、網走支庁管内で最
初に、「網走週報」を明治三五年四月に創刊
している。佐呂間の林由一も、昭和四年村会
議員に当選しているが、昭和三年遠軽を本社
に北見タイムスを旬間（一〇日に一回発行）
で発行、昭和一二年廃刊している。

林由一は、その後、道議会議員として活躍
している。

この頃の新聞経営は収入源であった購読料、
広告料が中々安定せずに経営難から廃刊する
もの、合併するなど幾多の変転を経ていて、
天風の新聞発行も何度か社名が変わって、ど
れが本当か混乱したがいづれも事実であった
のだろう。雄弁で筆がたち、情報通、人脈、
金脈が豊富であることが、政治家の登竜門で
あった。

やがて、天風は昭和六年の選挙で衆議院議
員に当選する。とうとう、天風の野望は頂点
をきわめたのであった。

一方、湧網線促進運動は加速していった。
上京しての陳情運動、関係町村民の署名運
動を展開するなど、官民一体の努力がつづけ
られた。ついに、昭和一〇年一〇月網走―常
呂間、翌一一年一〇月中湧別―中佐呂間間の
開通を見たが、日支事変勃発にあつて工事は
中断してしまつた。

代議士となつた尾崎天風は、国会議員とし
て湧網線の全通に奔走した。

ここに、一枚の書簡がある。

謹啓

時下秋冷之候 各位御健勝奉賀候
湧網線速成陳情之為 来る十日頃

網走町長上京の旨 申越相成候

丁度十五日より臨時議会開催も有

其の前十日頃の上京は陳情上好都合と

存じ候に 付ては、貴下にも有志と

御相談の上、大橋町長の方とも連絡を取り

御上京相成様 致度先は取り急ぎ

当用上如斯に御座候

十一月一日 敬具

尾崎天風

酒井村長殿

當時の上湧別村長、酒井佐一に宛てた衆議
院議員尾崎天風のおぎやかな毛筆の書簡であ
るが、その筆跡から北見の荒野を馬を追い、
駆け巡っていた御者、百太郎の面影の片鱗も
窺い知ることは、不可能であろう。

この時の陳情書の写しに次の添え書きがあ
つた。「昭和一六年十一月十三日尾崎天風氏
の案内で鉄道省に出頭 倉田局長 鈴木次官
に面接 速成方を陳情せり、」

こうした、天風の献身的な努力があつて、
戦後の経済復興と共に工事が再会され、二七
年一二月常呂―下佐呂間間、二八年一〇月下
佐呂間―中佐呂間間が完成して湧網線の全線

開通を見たのであった。

この、常呂―中佐呂間間のいわゆる中湧網
線の完成に果たした尾崎天風の功績は甚大で、
「尾崎線」とも呼ばれたという。

二八年中佐呂間で行われた開通祝賀会に天
風は功労者として招かれた。

天風の百太郎時代を知る古老は、「あの百
太郎がなア」と感慨深げに呟いた。

留辺蘂町と上川町の町界、石北峠に、原始
の樹間にかこまれ、両の手の甲を上にして洋
服の襟元に手を交差して差し込み、前方を凝
視する、尾崎天風の胸像が建立されている。

建立の由来は、「昭和八年より留辺蘂、上
川間の道路開削については懸案事項とされて
いたが、昭和二九年の一五号台風により層雲
峡山系の被害は四千万石の風倒木を生じた。

この被害木の伐出しのためこの道路の開削
をすすめ、昭和三一年九月記念すべき開通を
みたこの間の元代議士尾崎天風氏の功績を讃
えこの碑を建立した。」とある。

丁度、湧網線が全通した昭和二八年頃であ
る。「馬喰う一代」が映画化された。

米太郎には三船敏郎が扮し、天風がモデル
の六太郎を志村喬が好演した。

この時代の大ヒットした映画となつた。

あとでこの映画を観た「銭コの大太郎」こ
と天風は、「おれはあんなに銭コの亡者では
なかつたぞ」と弁解していたが、志村喬の演
ずる六太郎には大いに好感をもつたらしく、

二七年秋の選挙には、「銭コの六」「小坂六太郎」と投票しても有効であるという、届けをだしたほどであった。また「おれがインチキ野郎でも、ハッパ者でも、どんなに表現されていてもよい。この映画によって親子の愛情が復活し、北見の美しい人情が、天下に紹介

開拓の群像(七)

殿様 勝治こと相川勝治

(免囚保護事業に賭けた伝説の男)

大正の初期の頃である。トッピシ部落の原野約二六〇町歩の無償払下げを願ひ出て、荒野に一五戸の網走刑務所を出所した免囚者(刑期の終えた者)を入植させた男がいた。殿様勝治と呼ばれ、現在の石田牧場の辺りに御殿といわれる程の家に住み、隣接して自分の名をとった相川神社を建てる等、一時期、隆盛を極めていた。大正一一年に急死し、直後、相次ぐ火災で、住宅も全焼し、まさしく、忽然と御殿共々、消えてしまった殿様、相川勝治には、佐呂間の伝説の人に相応しい逸話が語り伝えられている。

ある時、ある所で、殺人事件が起こり、その捜索指揮をしていたのが相川警部であった。ところが何としても、犯人が上がらない、現

されれば」とさすがに、北見代表の政治家だけあって、北見が紹介されるということ、彼としては一番の収穫に考えているのだ。自分が、守銭奴になつていようと、それは北見発展への踏み台となるなら、なんの不满もないのである」と中山正男は書いて

場の風呂の陰から目撃していたと言う子供に容疑者の面通しをさせたところが、何と、相川警部自身を指したというのである。

犯人が犯人を捜索していたのだから、捕まる訳がなかったとも、実は、子供の勘違いによる濡れ衣だったとも言われているという話も残っている。

彼が生前中に、講談社から「殿様勝治」と言う彼の一代記が出版されて、当時、この本は部落の子供達の間でも回し読みされたというが、残念ながら、図書館など手を尽くして探してみたが、見つかる事は出来なかった。彼が、免囚保護事業をどういう経緯で取り組む事になったかは、全く定かではないが、網走の郷土史家中谷一郎の著書「網走監獄」のなかに、免囚保護事業に一生を捧げた、永専寺の住職の話の中で、身寄りの無い免囚者達を保護する為に慈恵院という保護施設を作り、未開地の払下げを受けて、開墾事業を起し、免囚者達の自活更生の道を開こうとして鑑沸村トッピシナイに大正三年に、慈恵院の分室をつくったが、余り良い噂が無くて石

ている。郷土愛にもえて、一生を、郷土の発展に賭けた男、開墾の遅れた北辺の開拓の歴史の中に、若き日の野望を膨らませ、逆境から見事抜け出し、郷土のために生き抜いた男、彼もまた、忘れてはならない開拓の群像の中の一人であろう。

若き日の宿敵、生涯とうしての親友であった「馬喰う一代」の米太郎の、葬儀の委員長は馬喰い百太郎こと尾崎天風がつとめた。のちに、天風の意思を継ぐかのようにその米太郎の息子、中山正男が参議院選挙に打ってだが、果たすことは出来なかった。しかし、なんとも粗削りで遠大な開拓者ならではの友情の発露ではないか。

参考文献

中山正男 「馬喰う一代」

「馬喰う一代」風雪編

佐呂間町史

常呂町史 常呂百年史

土佐郷土史

留辺蘆町史

上湧別町史

語り手 杉本 磐

上伊沢菊枝

資料提供 谷口重雄(端野町)

文責 上伊沢 洋

田某と言う男は逃げ帰ってきた。と言う一項がある。

最初、この分室が、相川の「博愛職工学会」ではと、思ったが、この度、発行された富武士部落史「風雪に耐えて」によると、この分室は浪速地区から幌岩地区あたりにあったと記されているので、全く別の組織であったようであるが、勝治の、免囚者保護事業も、精神としては、慈恵院の流れをくんでいたであろう。

勝治は、服役中に看守の信頼をあつめたという。

同房者にも睨みがきく、言わば牢名主的な存在になり、しかも警部部長上がりだけに、法に通じ、一目おかれる存在だったというのである。

そんなことから、みこまれてか、他の強力な手ずるがあつたのか、二六〇町歩もの未開地無償払下げを受けての農場経営者となったのであろう。

勝治は表向きは、クリスマスチャンで通っていたようで、御殿と呼ばれた住居に立派なグラウンドピアノの置かれた大接間があり、その壁には、十字架が祀られていた。

現在の富丘にあった近藤牧場はクリスマスチャン牧場として、その教えに従った農場経営は、日曜休日、禁酒農場という、徹底したものであった。

この信者達を中心にした佐呂間協会から牧師の山口庄之助が説教師として出向し、何度

か訪れたという、外人布教師はピアソン牧師夫妻であつたのかもしれない。

ところが、彼の実生活は、クリスマスチャンの生活とは似ても似つかぬものであつた。

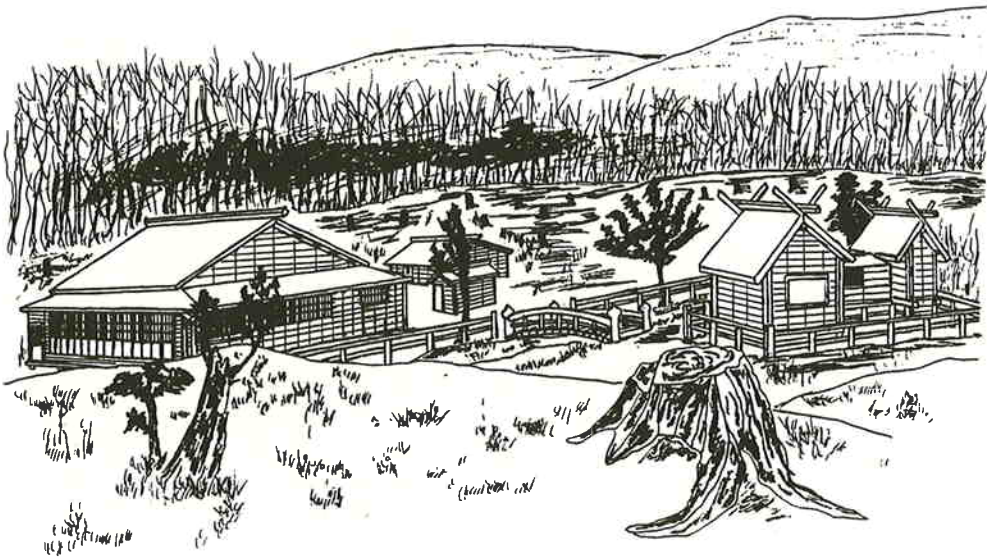
彼の過去を裏付けるよな粗野な行動が目立った様である。

佐呂間の街を酔って、日本刀を振り回して歩いたり、ある時、トップシ道路の工事が始まり、彼は、自分の家の前を通るように路線の変更を強引に働きかけていたが、意に反したのに立腹して、工事に関係していた同じ部落の浜本某の家に夜中に押し掛けて日本刀を振りかざして、殺すと迫ったが、土佐の出身であつたという浜本、諸肌を脱いで背をむけて、どつかとあぐらをかいて、殺るならやれと大見栄をきる、流石の勝治も振り上げた刀をおさめることが出来ずに、相手の豪胆さに感じ入り、その日本刀を贈って、和解したと言うのである。

山内春芳は、子供の頃、父の留作と勝治が懇意であつたこともあり、実際に御殿と呼ばれた勝治の家に数回遊びに出掛けた事があつたそうである。

玄関を入ると長い廊下があり、両側に幾つかの部屋が続いていて、その一番奥の部屋の日本刀を飾った床の間を背に、勝治は大きな熊の皮を敷いて座っていたという。

「山内の坊よくきたなア、と言って、床の間から飴をとってくれたそう、威風堂々とした暮らし向きであつたという。



相川御殿の全貌

勝治は、年に一度は、大阪方面に出掛け、帰りに、農場経営に必要な米や味噌の類から沢山の荷物を持ちかえり、佐呂間の駅通からその荷物を馬の背に連ねて、運ぶ様に、街の人々は好奇の目を見張ったという。

しかし、当時、隣接したトカロチの上杉農場と異なり、入植者の生活の面倒も充分ではなく、長続きせずに、出ていく者が後は絶たなかった様で、開拓も思うには進展しなかった。こんな物騒な、話がある。逃亡を防ぐ為か、腰縄つきで、農場に向かう一団を目撃した古老もいる。

勝治は気位の高かい本妻と、勝手仕事を任せていた妻が同居していて、妻には、盲の父と娘がいたそうで、娘が、札幌の女学校に行くことになり、佐呂間の街中で商業を営んでいた、林忠三郎の娘ナオも同じ女学校に入学するために、馬車を仕立てて、勝治の娘と乗り込んで、出発した。勝治は、乗り馬で駅のある下生田原まで送った。

髭を蓄えて、白馬に跨がった勝治は、瘦身で、眼光鋭くすれちがうものを圧したという。

勝治は、大阪に出掛ける時、農場に居留していた素人絵描きに掛け軸に絵を描かせて持参したこともあったそうで、それを、有名な絵描きの絵だと知り合いの金持ちに売りさばくこともあったようだ。農場の経営資金の捻出には苦勞をしていた節がある。

勝治の免囚者保護事業「博愛職工学会」は、開拓も思うに進まず、未開地を開放して、小

作人入植募集をするはめになる。

勝治が死去して、大正一四年、学会は解散した。二六〇町歩あった学会の用地は僅か六〇町歩になっていったという。この用地を譲り受けたのが、石田一郎である。

相川神社は昭和になって、部落民の手で道路上の今の位置に担ぎ上げられた。

現在の富武士神社の一部はその時の物だそうである。

その富武士神社脇の数百メートル海よりの畑のなかに、一本の松の太木がたっている。これが、勝治の墓標である。

勝治自身が免囚者であったこと、それが、どうしたことか、トップシの荒野に一五戸も

の前料のある人達を入植させて、自活更生を目指したことは事実でありながら、佐呂間の開拓の歴史の中では、属人的な差し障りを考慮してかタブー視されてきた。

勝治自身が余りにも謎の多い人物であった為か、まさしく、伝説化してしまったくらいすらする開拓秘話である。

現代でも、そうであるが、今から七、八〇年も前の社会認識のもとで、免囚者の社会への復帰は極めて困難であったに違いない。

そうした、一団をリードして問題を起こさず、事をすすめるには、勝治のような人物が適任であったのだろう。とすれば、語り伝えられている、勝治のいかにも作り話のようなエピソードは、特殊な扱いづらい、集団と、それを白眼視する地域の住民に対する、氣勢

だったのかも知れない。

佐呂間の北端、サロマ湖へとなだらかにつづく斜面、鬱蒼と繁った原始の森を切り開いた先人の中に、相川勝治の一団がいたということ、やはり特筆すべき、開拓秘話の一つには違いない。

ハッカの収穫期であったという、畑の切り株にとっかと腰をおろして、自ら吹聴する、三代將軍家光侯の陣笠をかぶり、陣羽織を身につけて、免囚者の作業集団を指揮している勝治の姿は、僅か、一五戸とは言えど、小国を治める殿様の風格に溢れていた事だろう。

語り手

山内 春芳
石田 和夫

文責 上伊沢 洋

富士原野に淋しそうにそそり立つ
相川勝治の墓標の木

